第　1　回

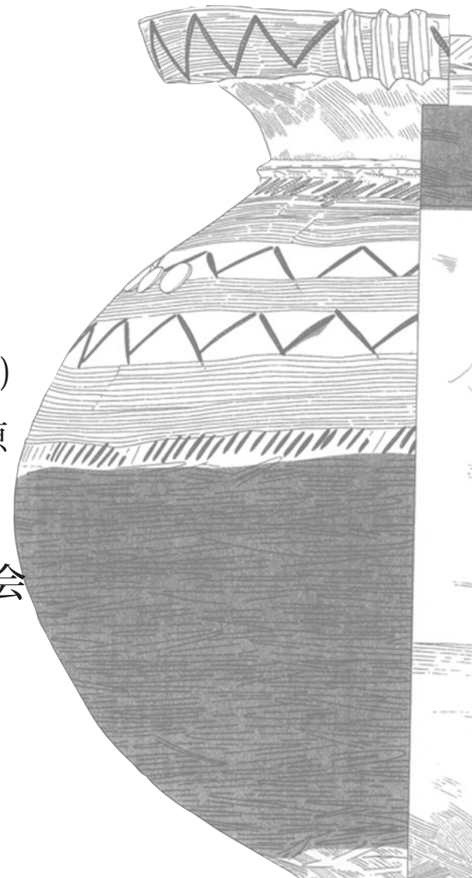
市原市遺跡発表会要旨

発 行 日　平成18(2006)年11月12日
編集・発行　市原市教育委員会
〒290−0011 千葉県市原市能満1489
TEL 0436(41)9000
印　　刷　三陽工業株式会社
千葉県市原市五井5510-1
TEL 0436(22)4348

第　1　回

市原市遺跡発表会要旨

平成18年度



平成18年11月12日(日)
サンプラザ市原

市原市教育委員会

国分寺台遺跡群出土の外来系土器

長平台遺跡 288 号墓出土遺物

長平台遺跡 289 号墓出土遺物

御林跡遺跡ほか出土遺物

南中台遺跡出土遺物

第1回　市原市遺跡発表会
プログラム

1. 開催日：平成 18 年 11 月 12 日（日）
2. 場　所：サンプラザ市原　2 階プラザホール（発表・展示）
3. 日　程

9：30　受　付

10：00　開会の言葉

教育長挨拶

調査・研究の成果発表　　頁

10：10 ～ 10：40　「南岩崎遺跡」　……　大村　直　2

10：40 ～ 11：10　「長平台遺跡」　……　小橋 健司　4

11：10 ～ 11：40　「西野遺跡」　……　小川 浩一　6

11：40 ～ 13：00　昼食・休憩

13：00 ～ 13：30　「国分寺台出土の古墳出現期外来系土器」　……　浅利 幸一　8

特別講演会

13：30 ～ 15：00

「古墳時代の始まりと外来系土器」

国士舘大学　講師　比田井 克仁　14

15：00　閉会の言葉

4. 展示公開時間

9：30 ～ 15：20

南岩崎遺跡 (塚越地区)

所 在 地　市原市南岩崎176-1他

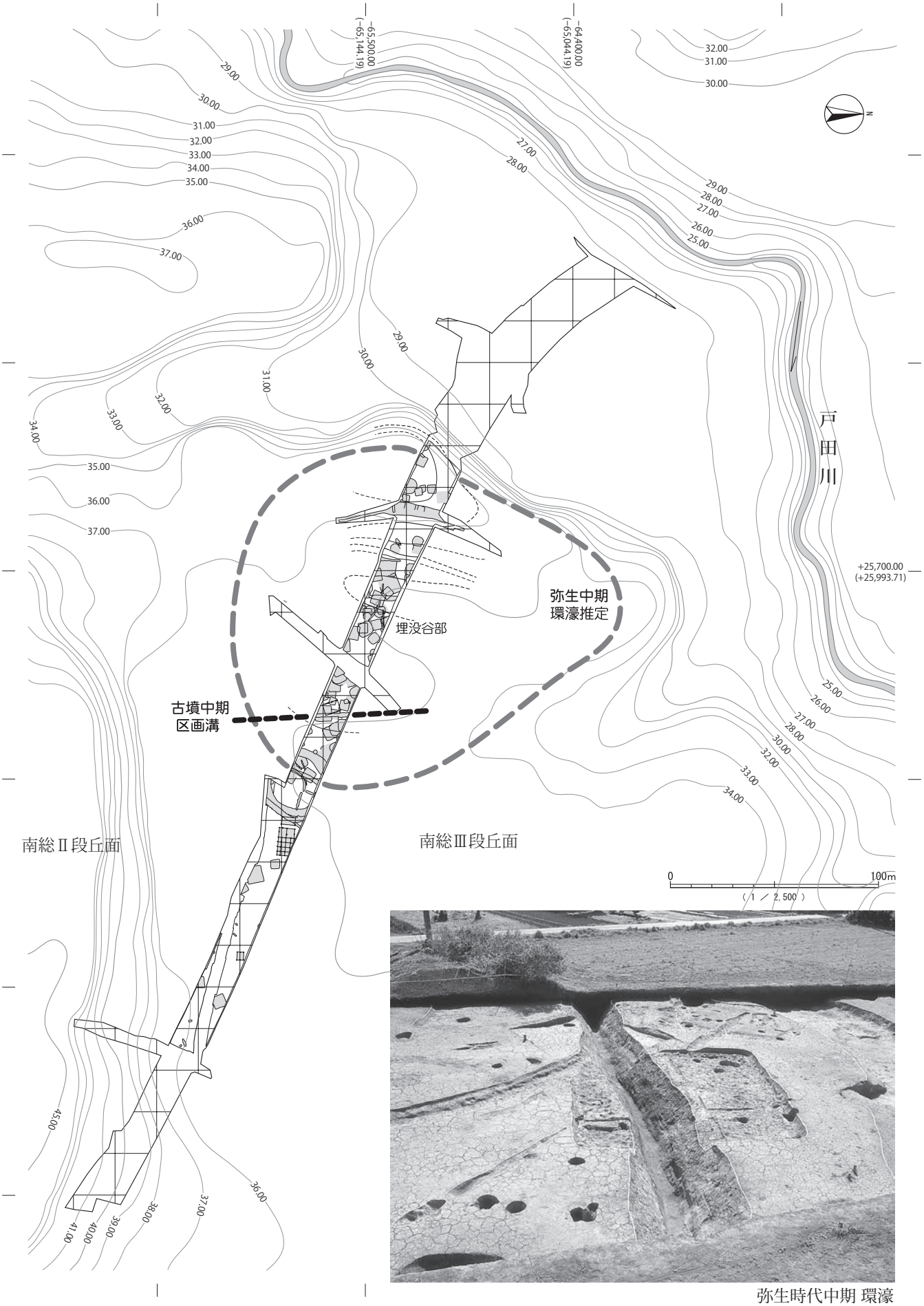
南岩崎遺跡は、養老川中流域左岸(西岸)にあり、養老川沖積平野に向かって北に突出する台地状地形上に立地します。今回の調査区は、その西側、養老川支流の西国吉川側に位置します。

調査概要　発掘調査は、平成11～14年度に行われ、本年度整理作業が完了しました。調査は、道路建設工事にともなうものであったため、調査区の幅は最大でも20m程度でしたが、東西方向は本調査範囲で315mを測り、南岩崎遺跡の主要部を横断する結果となりました。調査の結果検出された遺構は、縄文時代の陥穴6基、礫集積1基、弥生時代の竪穴住居26軒、方形周溝墓2基、土器埋設土坑(土器棺)3基、溝2条、土器集積遺構2基、古墳時代の竪穴住居45軒、古墳(円墳)2基、区画溝1条、土坑4基、土器集積2基、礫集積1基、中近世の掘立柱建物4棟、井戸3基、溝などでした。

本調査区では、弥生時代中期後半から古墳時代後期初頭の間、ほぼ継続的に竪穴住居がつくられ、とくに弥生時代中期後半(宮ノ台式期:西暦紀元前後)と古墳時代中期前半(和泉式期:4世紀末～5世紀前半)に盛期が認められました。弥生時代中期後半の溝2条はともに断面V字状であり、おそらくこの段階は「環濠集落」を形成していたと思われます。環濠集落は、弥生時代を代表するムラの形態であり、市原市では、過去12遺跡で検出され、本遺跡が13例目となります。すべて宮ノ台式期と推定しており、この時期の関東地方では、神奈川県鶴見川流域、東京都荒川流域とともに、濃密な分布を形成しています。南岩崎遺跡の環濠は、径164.5mを測り、おそらく調査区内の浅い谷の谷頭部を囲むように開削されたと想定しています。この段階の他の遺構としては、竪穴住居跡14軒、方形周溝墓2基、土器棺3基があり、竪穴住居はすべて推定環濠内で検出されています。また、環濠のほぼ中央部には大型の方形周溝墓が象徴的に造墓されています。一般の墓域は、環濠外東側にあったようであり、今回の調査区では方形周溝墓1基を環濠に隣接して検出しました。また、胎児から乳幼児の埋葬施設である土器棺群が、環濠内南東部で認められました。胎児から乳幼児は、埋葬方法とともに埋葬場所も区別されていたと思われます。

環濠集落は、中期末宮ノ台式期最終段階には機能を停止し、埋没したと推定しています。その後も小規模なムラはつくり続けられていたようであり、竪穴住居跡は弥生時代後期5軒、終末期3軒、古墳時代前期10軒を数えます。古墳時代中期初頭になると竪穴住居数は30軒と急激に増加し、分布も今回の調査区全域に拡大します。しかし、集落の拡大は短期に収束し、中期後半には縮小するようです。その過程で、調査区中央南北方向に区画溝が開削され、居住域はその西側に、区画溝東側には古墳群が成立します。区画溝の区画形状は、今回明らかにすることはできませんでしたが、あるいは集落範囲を区画していた可能性も考えられます。後期初頭(6世紀初頭)にはその区画溝も埋没し、ほどなく居住域としての利用を一端停止したようです。

今回の調査の出土遺物には、近畿地方の布留式甕、国内最古の須恵器窯である大阪府陶邑大庭寺窯産と推定する須恵器器台や、特殊なタタキ目(縄蓆文)もつ壺などがあり、古墳時代前期後半から中期の地域間交流の一端をみることができます。



弥生時代中期 環濠

南岩崎遺跡塚越地区全体図と周辺の地形図

長平台遺跡

遺跡の位置と調査経過　長平台遺跡は、養老川下流の右岸台地上に位置する弥生時代を中心とした遺跡です。海抜23m前後、西北西に抜ける谷を南側に見下ろす立地にあります。遺跡の近辺には、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として知られる御林跡遺跡と加茂遺跡C地点があり、上総国分寺跡北辺とはほぼ隣接しています。発掘調査は、国分寺台地区の土地区画整理事業に伴い、1981年から1982年にかけて上総国分寺台遺跡調査団によって行われました。

遺跡の変遷　4,820㎡の調査区からは、旧石器集中地点1箇所・弥生時代竪穴住居跡（中期2棟・後期57棟・終末期21棟）・古墳時代前期竪穴住居跡2棟・方形周溝墓（弥生後期3基・弥生終末期3基・古墳前期13基）・平安時代方形周溝状遺構1基・近世土壙墓1基が検出されています。

変遷を見ると、おもに弥生時代後期の竪穴住居跡と方形周溝墓で構成される集落が弥生時代終末期まで続き、古墳時代前期の墓域へ変化するという展開過程を追うことができます。この弥生時代から古墳時代にかけての時期が長平台遺跡の最盛期です。

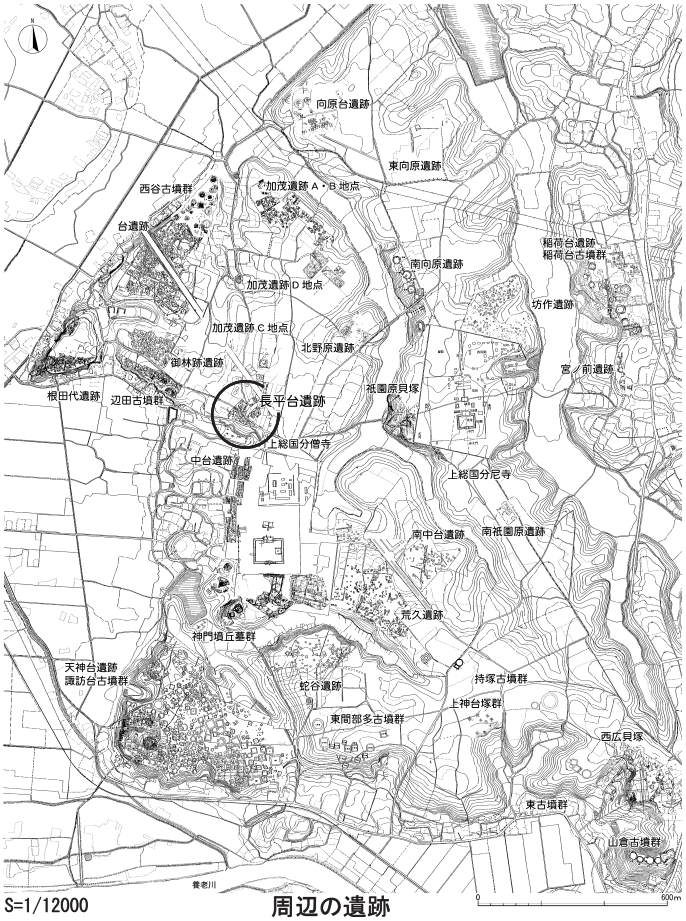
弥生時代後期のムラ　調査区北側に位置する弥生時代後期の方形周溝墓は、後期前半の竪穴住居跡の上に後から構築されており、後期前半の居住域が展開していく過程で墓域として設定されたことがわかります。この一群のうち、201号と202号は、接しながらも前者が平面形を歪めて切り合わない関係にある点から、201号が後に造られたと考えられます。201号では、方台部に1箇所、周溝内に5箇所の埋葬施設が検出されています。副葬品は、中央の埋葬施設から帯状円環形銅釧の破片とガラス玉14点、周溝内南側からガラス玉16点、周溝内西側からガラス玉1点が出土しています。また、周溝内の埋葬施設上には、供えられたらしい壺形土器がまとまって検出されました。

弥生時代から古墳時代へ　若干の空白期間をおいて弥生時代終末期に築造された方形周溝墓288号・289号では、周溝内から東海地方に系譜のある土器群が出土しています。

288号は墳丘が破壊されずに残っており、その上面からローム層まで掘り込んで大規模な埋葬施設（上段：4.4×3.8m、下段：3.6×1.6m）が構築されています。鉄剣1振とガラス玉17点が副葬品として出土しています。周溝は西角が陸橋状に掘り残されており、この付近を中心に、在地的な土器、非在地的な要素を持つ在地的な土器、非在地産の可能性が高い土器が入り混じって出土しています。

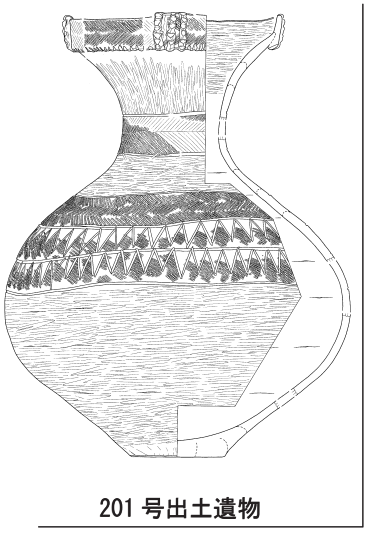
289号は288号の南東辺に連続して構築されています。288号と同じく北角一箇所を陸橋状に掘り残していますが、墳丘はほとんど遺存せず、埋葬施設も検出できませんでした。周溝東角と南角には、非在地的な壺形土器が配置されていた様子で検出されています。また、南東辺で切り合う竪穴住居跡との接点からは、東海地方に類例の多い朱精製用石臼に似た石器が出土しています。

東海西部からの移住？　288・289号墓で出土した東海地方風の土器は、葬送儀礼の道具立て、あるいは墓への供えもので、葬儀の際に参列者が持ち寄った品だとしても不思議ではありません。しかし、これらの墓が築かれる少し前の時期に、東海地方の土器がまとまって出土する竪穴住居も発見されていますので、非在地系土器の示す故郷からの移住者がこの地に暮らしたことはほぼ間違いないことです。288・289号墓のような古墳に近い墳墓が築かれるようになる背景を考えるには、移住者の存在と葬送の作法（文化）、両方の事情を考慮に入れた検討が重要だと思われます。



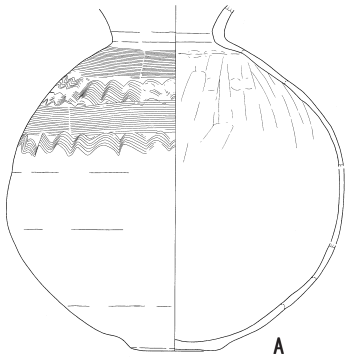
S=1/12000

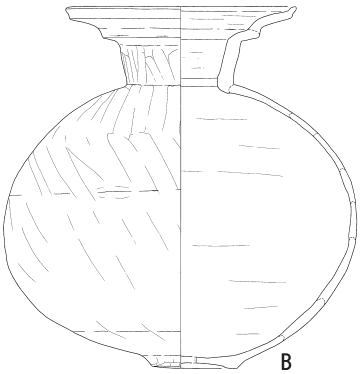
周辺の遺跡

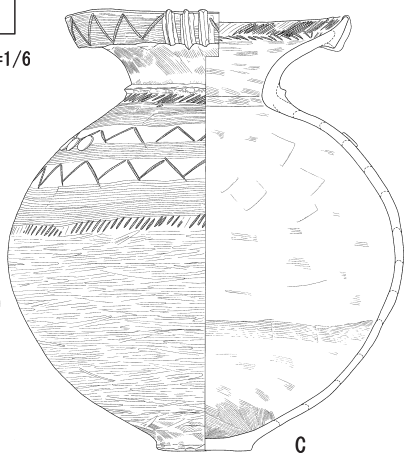


201 号出土遺物

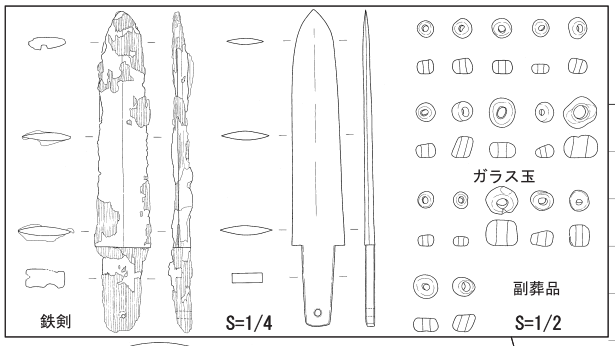
S=1/6

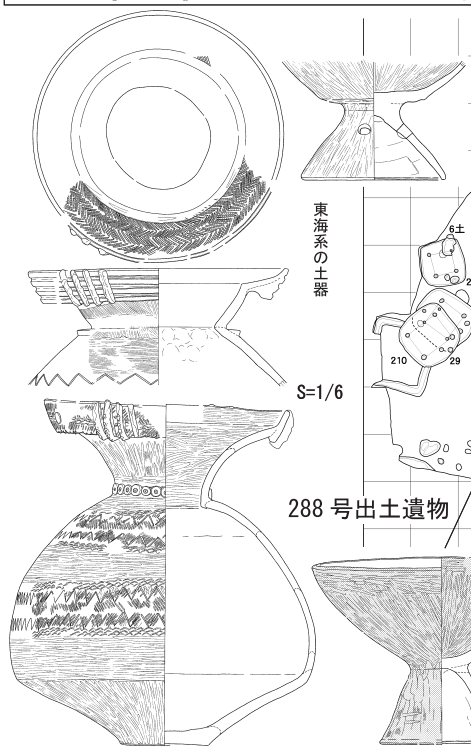




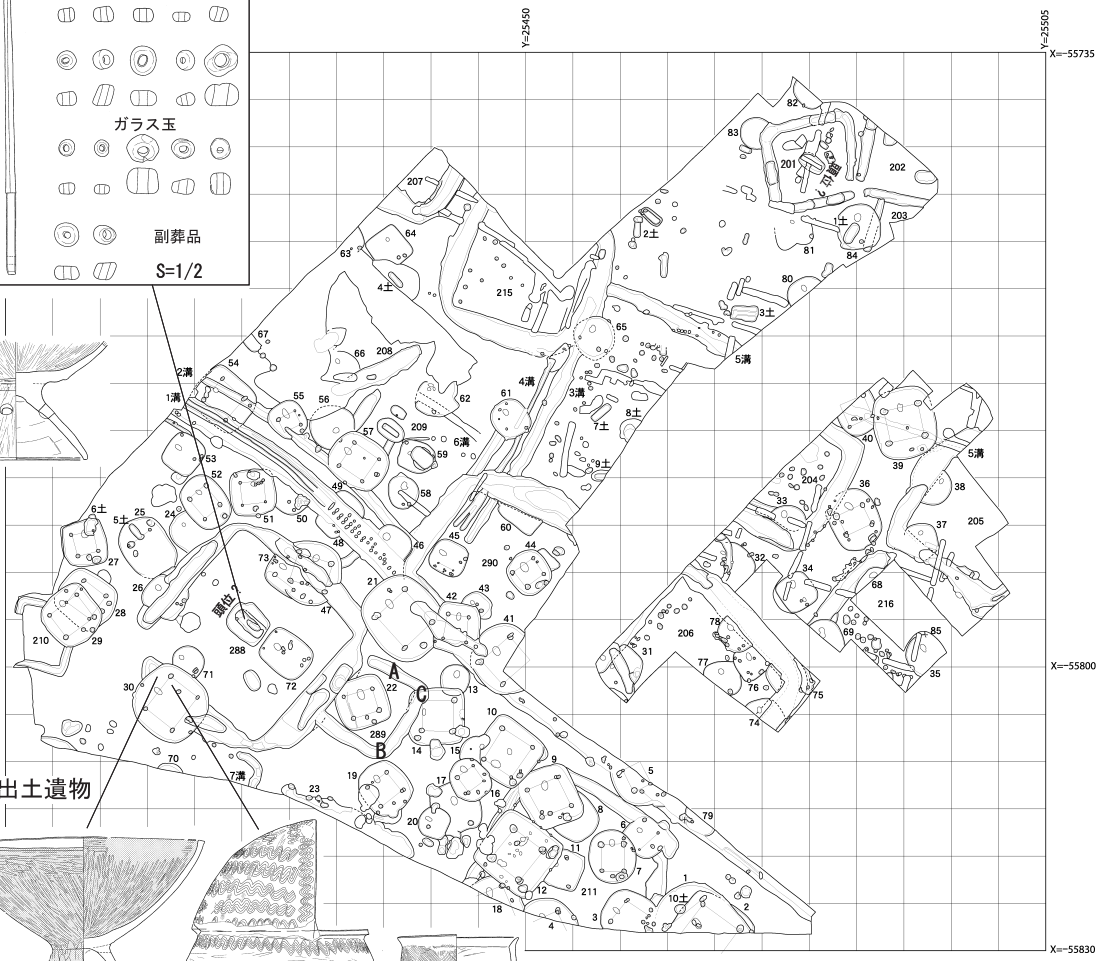


289 号出土遺物





288 号出土遺物



調査区全体図

S=1/800

西野遺跡

所 在 地　市原市西野字中村470 他

調査概要　西野遺跡を始めとした海上地区遺跡群は、平成９年度から15年度にわたって圃場整備事業に先行して調査が行われてきました。事業面積約3,000,000㎡の広大な範囲において、402,440㎡について確認調査を行い、用水路及び農道等、遺構を保存することが困難な地点を中心に9,940㎡については、本調査が行われました。

西野・権現堂・十五沢・宮原と多くの字にまたがる調査でしたが、遺構としては、西野遺跡を中心に８世紀後半～９世紀前半にかけての掘立柱建物跡群が見つかり、その中には方向に規格性を持った建物跡群が存在し、総柱の建物跡の柱穴からクリ・スダジイの柱根が出土しています。ちなみに、柱根の炭素年代測定では、伐採された年代が８世紀後半～ 10 世紀代である確率が 95.4％という結果でした。クリは、鉄道の枕木にも利用される湿気に強い木ですが、通直な高木材ではありません。この時期における都城の建物の柱材はヒノキ・スギが殆どを占め、かなり遠方からも調達していたようですが、在地の建物における用材利用は、近隣の広葉樹材を利用することがあったのかもしれません。

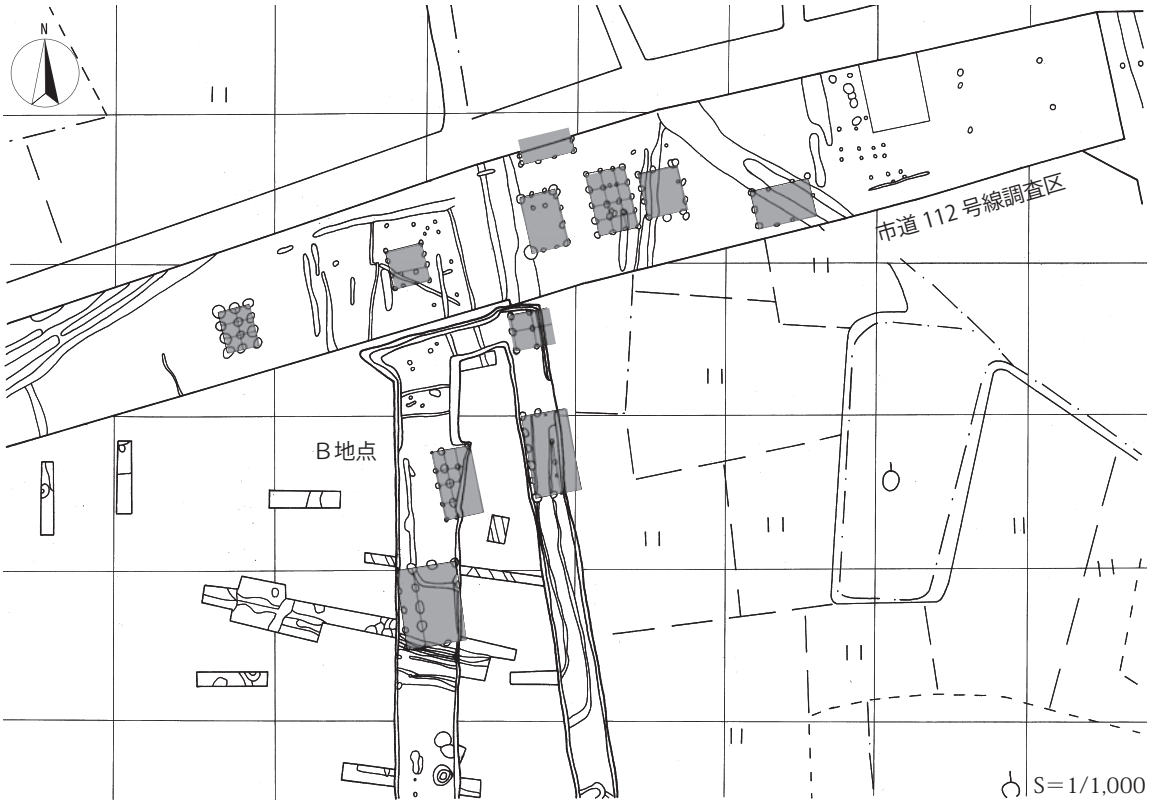
西野遺跡周辺は、字名「小折」に端を発した地名研究より、古くから海上郡衙推定地として、注目されてきました。また、十五沢坊ヶ谷遺跡は隣接地に海上郡衙の郡寺とも考えられる「今富廃寺」跡が存在したと考えられ、遺跡より寺の塔を模したミニチュアと考えられる「瓦塔」の一部が採集されました。

ところで、最近の調査例の増加から、郡衙遺跡と言っても、多様な在り方があるようだということがわかってきました。陸奥国白河郡衙である関和久遺跡は、整然と溝で区画された中に、正倉（穀稲などを収納しておく倉）等の諸施設が配置されて出土した郡衙遺跡の典型例です。一方、駿河国志太郡衙である御子ヶ谷遺跡では、地形的に制約された範囲に、郡庁や正倉、館などがそれぞれ独立して設置された例と考えられていますし、武蔵国都築郡衙と考えられている神奈川県長者原遺跡は、南寄りの比較的規模の小さな掘立柱建物跡が集中しているところです。また、墨書土器（墨で字が書かれている土器）等が殆ど出土しないものの、整然と立ち並ぶ建物群から郡衙遺跡の正倉と判断された相馬郡衙の千葉県我孫子市日秀西遺跡の例もあります。これらを郡衙遺跡と判断するには、その遺跡の他の遺跡との位置付けや、関わりを総合的に検討していく必要があり、その判断は極めて難しいと言うことができます。

では、西野遺跡とは何だったのでしょうか？遺構の状況から集落遺跡ではないと思われます。竪穴住居跡が見つからないこと。掘立柱建物跡がある程度の方向的規格を持って展開していること。等の特徴は、西野遺跡がいわゆる集落遺跡とは異なる性格を持っている証拠と言えるでしょう。一方、墨書土器や、硯・石帯といった文房具や役人の存在を示す遺物の出土が見られないこと。建物跡を区画するような溝や土塁といった施設が見られなかったこと。等は、西野遺跡が郡衙遺跡の持つ特徴を兼ね備えていない点であると言えましょう。このことから推察すると、西野遺跡は郡衙遺跡の周囲を取り巻く関連遺構の一部を構成していたと言うことはできるのではないでしょうか。

いずれにしても、西野遺跡の性格を検討するには、調査面積がとても少ないことは言えますので、今後、周辺部（特に北側）の調査成果が蓄積されることが期待されると思います。

西野遺跡群位置図



西野遺跡群 B 地点掘立柱建物跡（宮本 2006 に一部加筆）

国分寺台出土の古墳出現期外来系土器

今から1,800年ほど前の３世紀は小国家単位の弥生時代が終わりを告げ、ヤマト朝廷による中央集権的な古墳時代が始まろうとする時代で、考古学では古墳出現期や発生期古墳時代と呼ばれています。

「魏志」倭人伝には、「２世紀後半倭国が大いに乱れ何年も互いに攻め合った為、諸国が合議して共に一女子を立てて王（女王「卑弥呼」）とした。卑弥呼が死んだ後、男王を立てたが国中が服従せず互いに殺し合い、そこで卑弥呼の宗女である年十三の壹与を立て王とし国がようやく治まった。」事や、卑弥呼に率いられた「邪馬台国」が登場し、それと連合する国々の名や特産物・習慣・風俗、また邪馬台国と敵対していた男子を王とする「狗奴国」の名も記されています。

弥生時代の市原を含めた東京湾岸地域は、土器や方形周溝墓と言うお墓の形にも共通点が認められ、南関東で小文化圏を形成していました。弥生時代後期末の３世紀頃になると国分寺台では、当時の先進地域であった畿内・北陸・東海・山陰や北関東地域など他地域で作られた土器の特徴を備えた土器（外来系土器）が見られるようになります。そして東国最古の円丘に突出部を付けた前方後円型の墳形の神門５号墳が現れます。列島各地ではそれぞれ特徴のある墓制（お墓の形や葬送儀礼に使用された器など）でしたが、各地で他地域の墓制の受容や影響を見ることができます。こうした動きは土器や墓制に顕著に表れ、古墳時代が始まろうとする中で人々が移動すると同時に技術・習慣・マツリゴトと言った地域の文化も移動した事を強く示唆するもので、列島規模で沸き起こった、弥生から古墳時代への急激な社会変化を想定させるものです。

市内で出土する外来系土器にはどのようなものがあるのでしょうか。東海西部系（伊勢湾岸地域、愛知県・三重県・静岡県西部・岐阜県）、東海東部系（天竜川以東の駿河湾岸地域、静岡県東部・神奈川県の一部）、北陸系（福井県・石川県・富山県・新潟県）、畿内系（奈良県・大阪府など）、近江系（滋賀県・京都府など）、北関東系（千葉県北部・茨城県など）の土器を見ることができます。外来系土器と言ってもさまざまな物が有ります。例えばA地域の技法を忠実に模倣し、B地域で作られた土器。A地域の技法の影響を受けて、B地域で作られた土器。A地域の技法の影響を受けB地域を経由してA・B両地域の影響を受けて、C地域で作られた土器等に分けられます。また、A地域で作られそこで消費されるべき土器が、B地域に直接持ち込まれた場合は「外来土器」と言えるでしょう。

東海西系土器には、「S字甕」やパレススタイル壺の他、瓢壺・高杯・小型高杯などが見られます。S字甕（口縁部断面形がアルファベットのSの字に似ているところから付けられた、S字状口縁台付甕の略称）と言う台付の肉薄型の熱効率の良い煮炊き用の甕があります。御林跡遺跡119住（21）・蛇谷遺跡71住（19）・79A住（20）の住居跡から完形に復元されたものが出土し、長平台・天神台遺跡などでも出土しています。パレススタイル（宮廷式）壺は白色系の胎土を使用し、細かな文様が刻み、赤く彩色される事が特徴です。全国的に土器の文様が簡素化していく傾向の時代にあって濃尾平野のこの土器は異彩を放っていました。国分寺台遺跡群では唯一、長平台遺跡から一角がブリッジ状に途切れる方形周溝を巡らした288号墓や289号墓から搬入品が複数出土しています。

東海東部系土器は、下膨れで腰の折れの形をした壺と、台付甕を有する土器群です。弥生後期末の住居跡から多く出土する台付甕や腰の折れた装飾壺は盛んに模倣され、南関東の弥生後期から末の

久ヶ原や弥生町、前野町に大きな影響をあたえています。

北陸系土器の「５の字状有段口縁甕」も口縁形が数字の５に似ていることから付けられた名称です。５字状口縁甕は、北陸や山陰地域の特有な甕ですが、関東の例は北陸の影響下にあったと指摘されています。国分寺台では、神門５号墳、上総国分僧寺西部の中台遺跡、現在の中央消防署西側の南中台遺跡から非在地的な胎土の複数の甕や器台が出土しています。５号墳では口縁横線文と上下に櫛歯押圧文を施した北陸系の小型壷（42）が、まとまって出土した南中台13号住居跡は（1 ～ 9）、住居跡の平面形や特殊ピット（住居内に設けられた穴）の位置までもが酷似し、土器と共に人々までもが移り住んで来たことを強く印象付けるものです。

畿内系土器で最も多く見られるものは「叩き整形甕」と呼ばれる、器面を板で叩き締めたもので、器表面に数本単位の太い条線状の圧痕としてのこります。弥生系の甕は器肉が厚く、天神台遺跡（28）や御林跡遺跡（26）で出土し、東海地方の影響を受けた台付の叩き甕（27）も見られます。また、神門３号墳下層の住居跡からは内面を削ってやや薄く仕上げた技法を模倣した甕が出土しています。この薄甕は庄内甕とも言われ、奈良県の櫻井市の纒向遺跡を中心に大和盆地の東南部で作られた先進地の煮炊き用の器でした。神門４・５号墳のそれぞれタイプの異なる加飾壷（38 ～ 40・44）のうち40・44は畿内系で44は国分寺台で最も残りの良い畿内系加飾壷です。

その他の国分寺台の土器　神門３号墳では瓢壷（55）・手焙形土器（60）は、東海西部系ですが、壷（50 ～ 54）は、系譜を追えないほど在地化しています。諏訪台古墳群の方墳一括資料（61 ～ 66）の二重口縁壷（41・42）は外反する口縁接合部内外面に明瞭な段と頸部直下にS字甕同様な櫛描き文を施した東海西部系で、42の口唇部には櫛歯の刺突を有し新古の要素があります。器台と壷の口縁を合体したような結合器台（69 ～ 73）は、本来は北陸系のですが国分寺台出土例は在地化していると思われますが、中には他地域に類似品が存在し系譜を追うことが可能です。

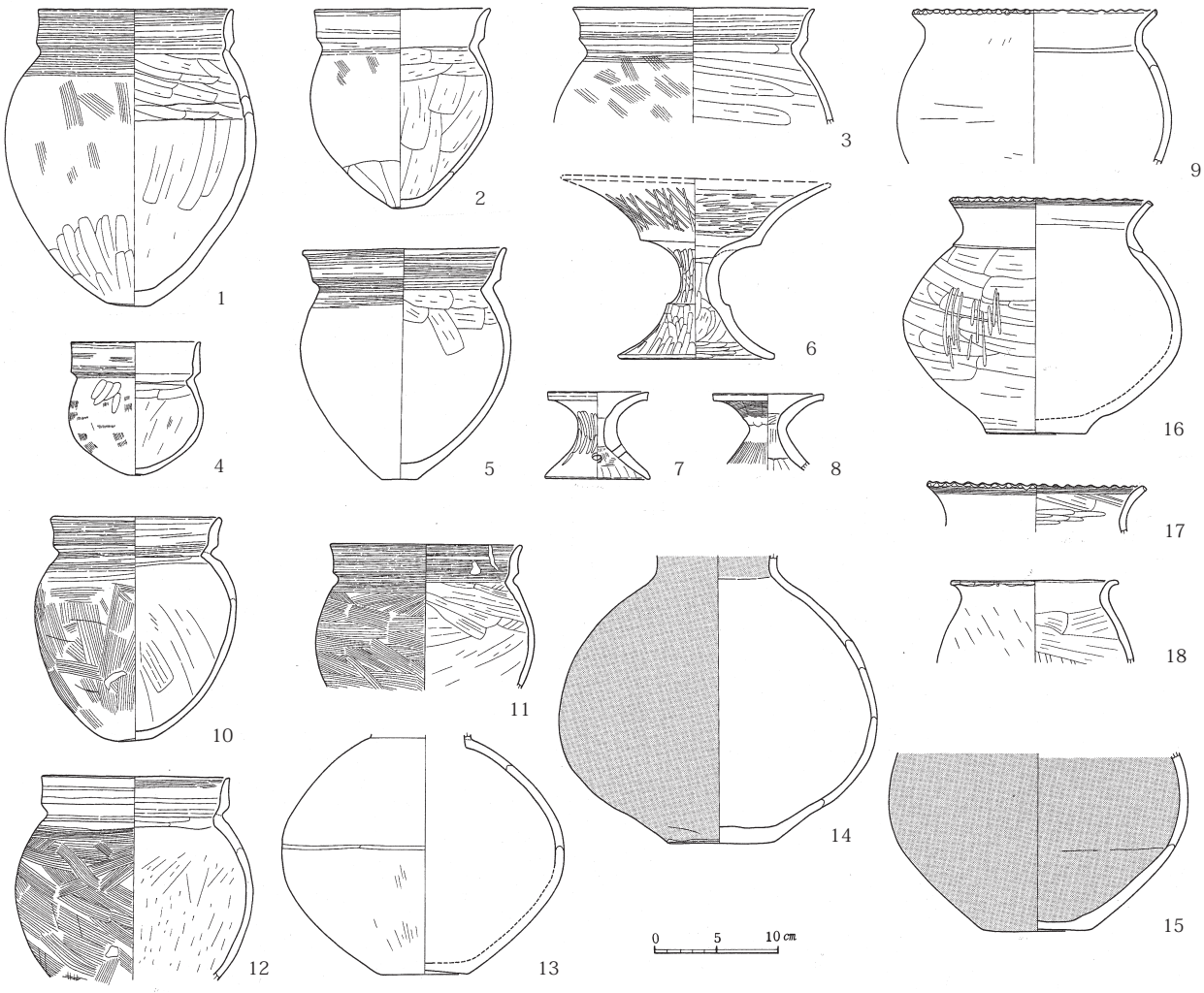
このような外来系土器は、記載された記録物が無い時代にあって、往事を知る重要な手がかりとなり、例え小さな破片であっても意味する事は完形品と同じです。発掘された竪穴住居跡や古墳などの遺構は調査後失われたものの、そこから出土した遺物には想像を絶する情報が埋もれていると言えます。

出展および出土遺跡名　1 ～ 9（南中台 13 住）・10 ～ 18（南中台 14 住・参考文献①）、19（蛇谷 71 住）・20（蛇谷 79A 住・文献②）、21 ～ 25（御林跡 119 住・文献③）、26（御林跡 OH144 住・木對）、27（天神台 TJ56 住）、28（天神台 TJ42 住）、29（神門３号墳周溝外）、30 ～ 33（加茂 C 方形周溝墓・文献④）、34 ～ 37（長平台・文献⑤）、38 ～ 43（神門５号墳・文献⑥）、44 ～ 49（神門４号墳・文献⑦）、50 ～ 60（神門３号墳・文献⑧）、61 ～ 66（諏訪台古墳群セ 28 － 043 号墳）、67（辺田１号墳・文献③）、68 ～ 69（天神台 TJ42 住）、70（台 058A － 051 住）、71（台 058A1005）、72（御林跡 130 住・文献③）、73（根田代２号墳・文献⑨）

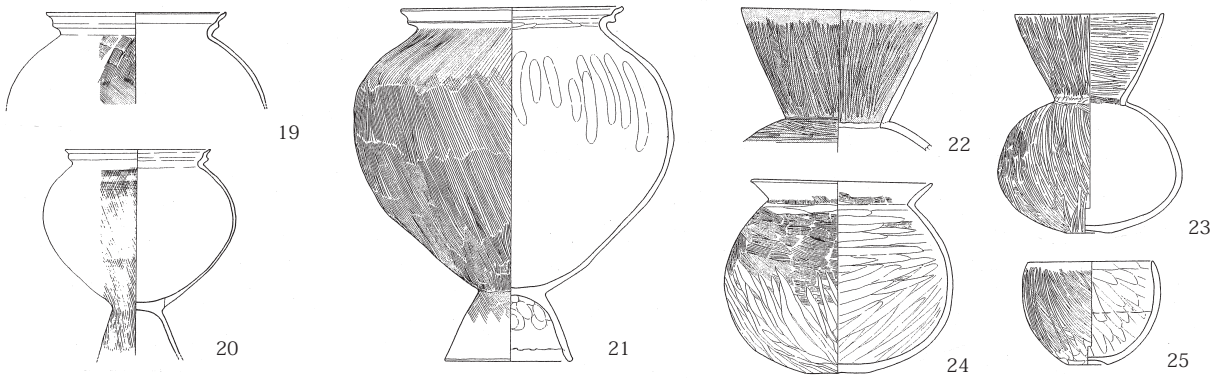
文献一覧

①比田井克仁『古代第 83 号「南関東出土の北陸系土器について」』早稲田大学考古学会　1977.3
②滝口　宏　編『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査団　1977.3
③木對和紀『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』市原市教育委員会　2004.3
④谷島一馬・對馬郁夫ほか『加茂 C 地点発掘調査報告書』上総国分寺台遺跡調査会 1976.3
⑤小橋健司ほか『市原市長平台遺跡』市原市教育委員会　2006.2
⑥田中新史『古代第 77 号「出現期古墳の理解と展望」』早稲田大学考古学会　1984.6
⑦田中新史『古代第 63 号「市原神門４号の出現とその系譜」』早稲田大学考古学会　1977.12
⑧浅利幸一ほか『市原市文化財センター年報（昭和 62 年度）「神門３号墳」』市原市教育委員会　1989.3
⑨大村　直ほか『市原市根田代遺跡』市原市教育委員会　2005.3
⑩『人が動く・土器も動くー古墳が成立する頃の土器交流』かみつけの里博物館　1998.7
⑪特別展図録「倭国乱れる」国立歴史民族博物館　1996．10

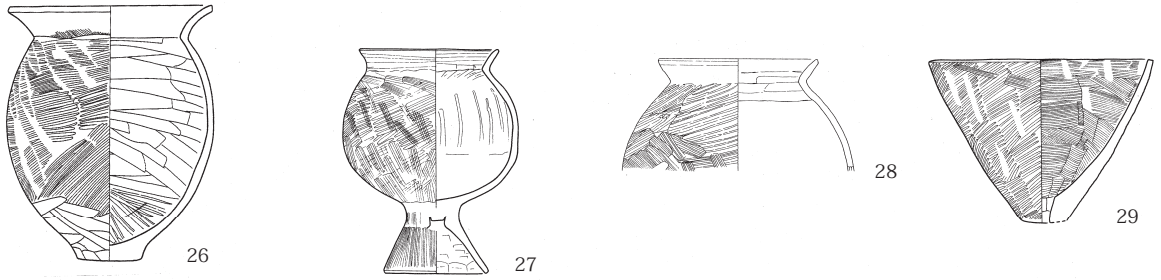
国分寺台遺跡群主要遺跡分布図



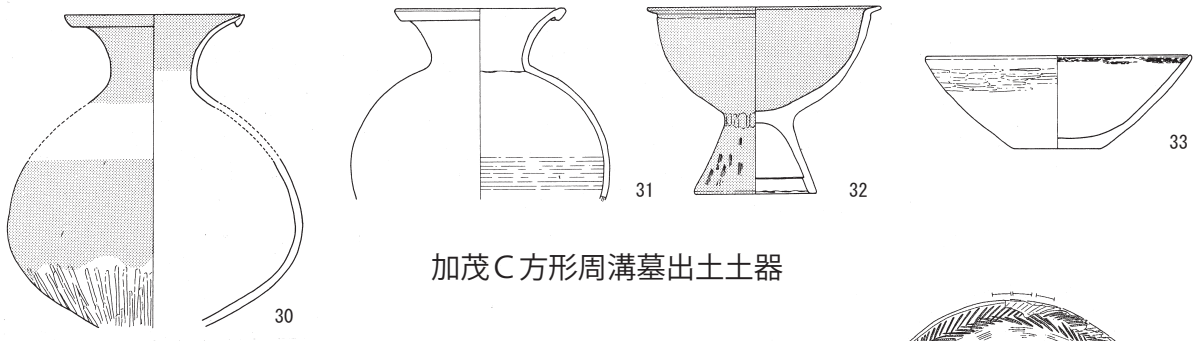
5の字状口縁甕と共伴土器（北陸系土器）



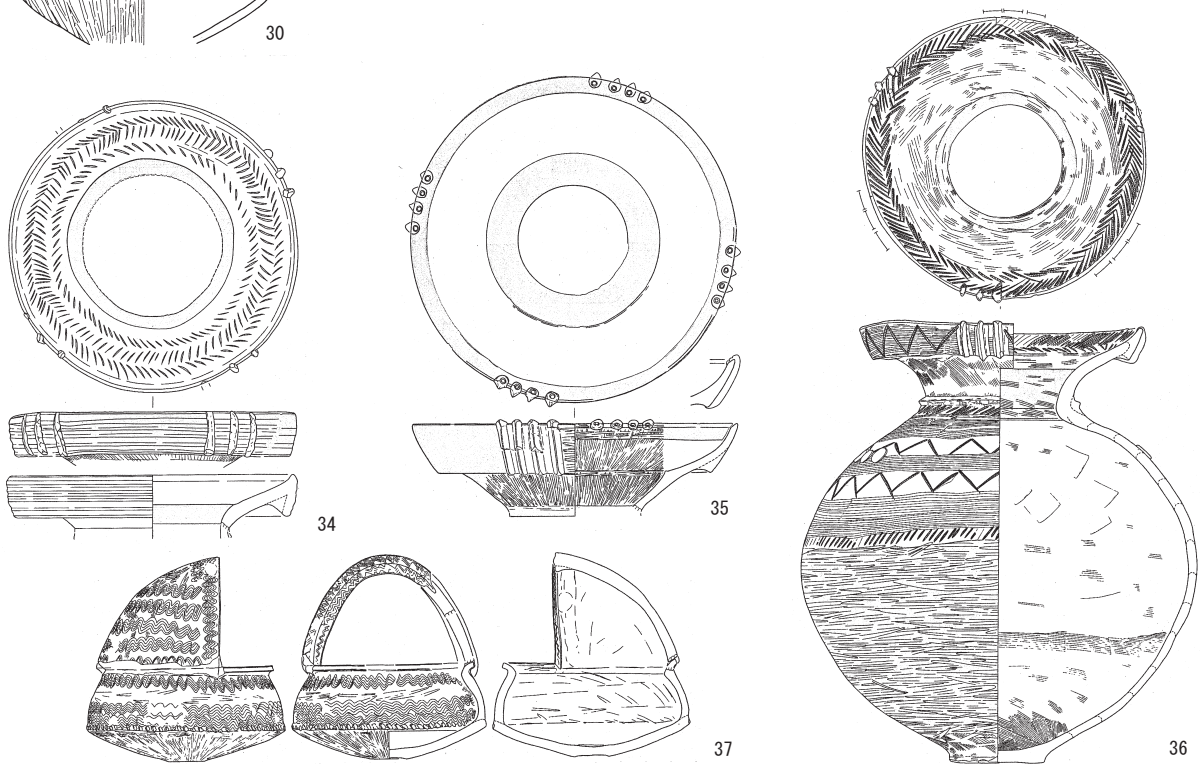
S字状口縁甕と共伴土器（東海西部系土器）



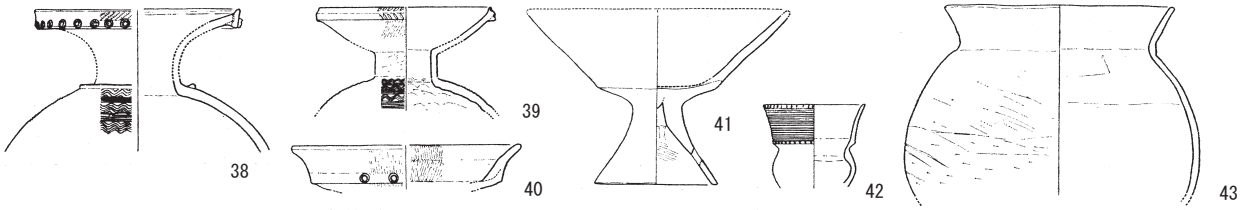
叩き成形土器（畿内系土器）



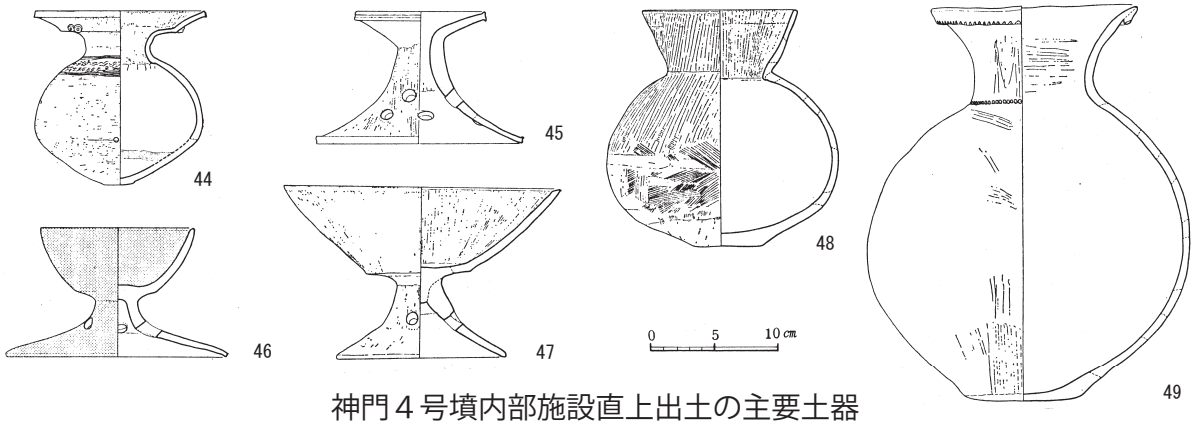
加茂Ｃ方形周溝墓出土土器



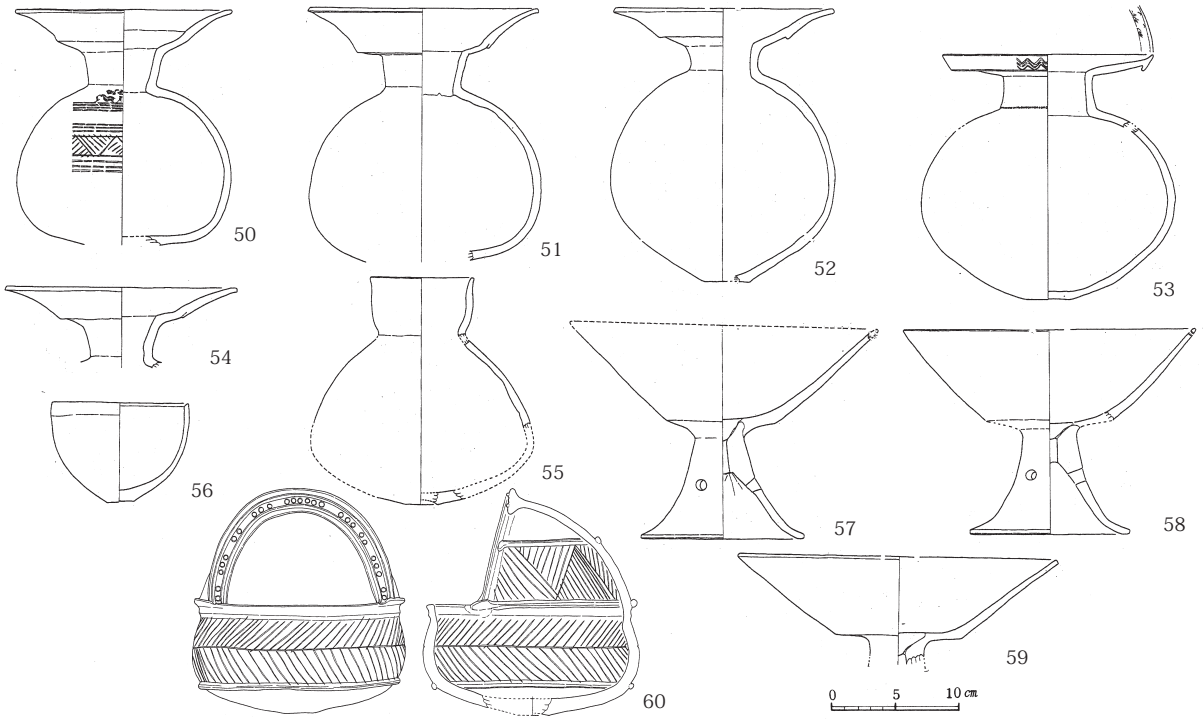
長平台遺跡パレス壺と手焙形土器（東海西部系土器）



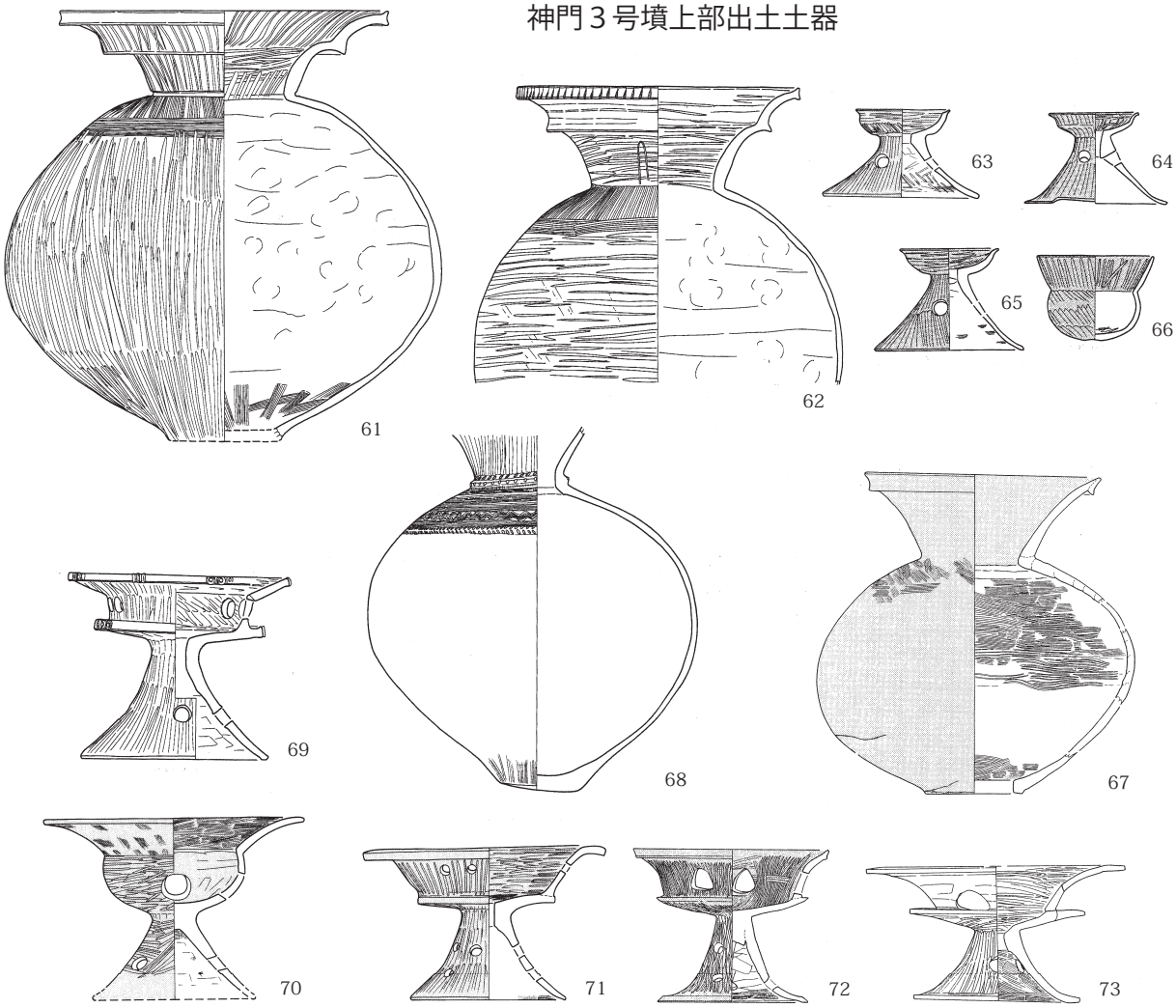
神門５号墳出土土器



神門４号墳内部施設直上出土の主要土器



神門３号墳上部出土土器



諏訪台古墳群と国分寺台遺跡群の結合器台

【特別講演】

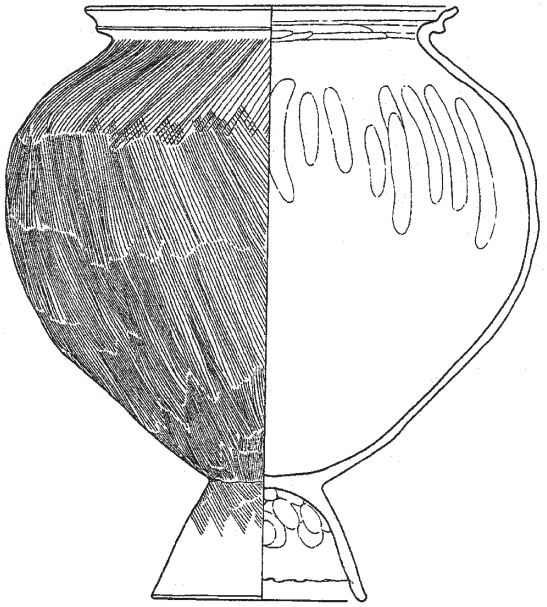
演 題 「古墳時代の始まりと外来系土器」

国士舘大学　講師

比 田 井　　克 仁

－メモ－

－メモ－



御林跡遺跡 119 号住居跡出土